舞踊における動機づけの研究

――目標志向性との関係――

Motivation and Goal Orientation in Dance

児童学科　Dept. of Child Studies　澤田美砂子　Misako Sawada　杉山　哲司　Tetsuji Sugiyama

抄　　録　本研究では，舞踊における動機づけについて，スポーツの動機づけを測定する尺度として開発されたThe Sport Motivation Scale（SMS）に基づき，舞踊に特有の「表現」の下位尺度を新たに加えて検証した。舞踊を実施している高校生および大学生217名を対象に，舞踊に対する動機づけ尺度，および舞踊の目標志向性尺度が実施された。その結果，第一に舞踊の動機づけはSMSで示されている7つの因子に対応した構造が見られることが明らかとなった。第二に，舞踊における動機づけが目標志向性とどのような関連を持つのかを明らかにするため，課題志向性と自我志向性に加えて，鑑賞者や他のダンサーとの関係性に着目した「関係志向性」に関する質問項目を用いて検証したところ，自我志向性は外発的動機づけと，課題志向性と関係志向性は内発的動機づけと正の相関を持つことが明らかになった。また，表現の動機づけと，課題志向性と関係志向性との間に正の相関が見られた。

キーワード：動機づけ，自己決定理論，目標志向性，舞踊

Abstract　The purpose of this study was to develop a scale measuring motivation in dance, based on the Sport Motivation Scale (SMS). The Dance Motivation Scale (40 items) and the Dance Goal-Orientation Scale (25 items) were applied to 217 dancers (2 males and 215 females). A factor analysis indicated that the dance motivation scale had 7 subscales (know, accomplish, experience stimulation, external regulation, introjection, identification, and amotvation). In terms of the goal-orientation, ego-orientation related positively to external regulation, while task-orientation and communication-orientation mainly related to intrinsic motivation. In addition, the results of our study showed a relationship between motivation of expression and task-orientation and communication-orientation.

Keywords : motivation, self-determination theory, goal-orientation, dance

1. はじめに

舞台芸術としての舞踊は，舞台上で踊りを他者（鑑賞者）に見せるという，踊り手と受け手のコミュニケーション性を持った身体活動であるととらえられる[1)]。一般的なスポーツ活動において付随する，勝敗や記録への挑戦といった現象が，舞踊においてはコンクール等一部の場面を除いて当てはまらないことが多い。同じ身体を介した活動であるが，こうした側面においてスポーツとはその特性が異なる舞踊において，踊りを楽しみたい，踊りを続けたい，などの動機づけに関しては，舞踊のみに焦点を当てた研究はこれまでほとんど行われていないと思われる。

人々のスポーツ行動の背景にある動機づけに関しては，いくつかの理論のもとで研究が行われてきた。これまでは特に，報酬や賞賛といった外的な要因のために行動が生起される外発的動機づけと，活動それ自体に興味や目的があるといった内発的動機づけとを比較し，対として分類するような考え方が中心

であった。こうした考え方に対し，自己決定理論により外発的動機づけと内発的動機づけをひとつの連続帯ととらえ，外発的動機づけから内発的動機づけに至るプロセスを説明しようとする概念があげられた[2, 3]。Pelletier, et al.[4] はこの自己決定理論に基づき，スポーツ領域における動機づけを測定する尺度として，The Sport Motivation Scale（SMS）を作成し，杉山がその日本語版作成を試みている[5]。SMSは，内発的動機づけ（理解すること，成就すること，刺激を経験すること），外発的動機づけ（外的制御，取り入れ，同一化），非動機づけから構成されるが，自律性の程度から，非動機づけ→外的制御→取り入れ→同一化→内発的動機づけ，という連続的な段階が存在すると考えられている。内発的動機づけにおける，理解することへの内発的動機づけ（IM to know）とは，探求や好奇心，理解することへの知的探求に関連しており，人が新しいことを理解する際に経験する楽しみのために活動が遂行される過程を意味している。成就することへの内発的動機づけ（IM to accomplish）とは，何かを成就する時，または何かの創造を試みる時に経験する楽しみのために活動を行う過程を示す。刺激を経験することへの内発的動機づけ（IM to experience stimulation）は，活動に対する楽しみや興奮，熱中といった感覚を刺激する経験を意味する。次に外発的動機づけにおける，外的制御（External regulation）とは，外的報酬・賞賛や他者からの強制・罰などに関連するものである。取り入れ（Introjection）では，外的制御のように行動を引き起こすための外的資源は必要なく，自分自身の不安や罪のような内的圧力として内面化されている。例えば，良い体型を維持しなければならないという内的圧力により活動を継続していることなどが当てはまる。同一化（Identification）は，その活動を行うことが重要であるとして，圧力なく内面化されていることを意味する。例えば，スポーツを行うことにより新たな人間関係を築くことができる考え，スポーツを実施することなどが当てはまる。非動機づけ（Amotivation）とは，学習性無力感と同義であり，内発的動機づけ，外発的動機づけのどちらにも当てはまらず，その活動を行う理由が見出せない状態を意味する。

また自己決定理論とともに，スポーツに対する動機づけについては，目標理論が関わるとされている[6]が，杉山[7]は，これらスポーツに対する動機づけと目標志向性との関係に着目している。課題志向性は課題の熟達を目標とするものであるため，内発的動機づけに影響を及ぼし，自我志向性は他者の中で相対的に優位に立つことを目標とするものであるため，外的制御に影響すると予測し検証を行っている。

本研究では，スポーツと同じ身体活動である舞踊についても，SMSと同様の動機づけ構造が見られるのかどうかを検証することを第一の目的とする。さらに，舞踊が作品を鑑賞者へ表現する形式を持つものであることから，他者（鑑賞者）への伝達や表現に関する動機づけが舞踊の特性として存在するのかどうかを明らかにするため，SMSで検証されてきた7つの下位尺度に新たに「表現」を加え，舞踊独自の動機づけの構造を明らかにすることを試みる。なおこの「表現」の概念は，舞踊が本来持つ，他者に表現すること自体への興味や意欲のために活動が遂行される過程を意味し，外発的動機づけにおける外的制御のように他者からの強制や報酬を期待しているものとは区別されるのではないかと予想した。続いて，舞踊の目標志向性が動機づけとどのような関連を持つのかについて明らかにすることを第二の目的とする。目標志向性については，舞踊が鑑賞者に対して作品を上演することに加え，複数名で作品を演じることが多いという特性を持つことから，他者との関係性（自分と鑑賞者・自分と他のダンサー）を重要視する「関係志向性」の概念を新たに加えて検証することとした。また，他者よりも優位に立ちたいという自我志向性の中にも，同じ作品を踊るダンサーである他者よりも優れたいと思う場合と，他の団体のダンサーである他者よりも優れたい場合の二つのパターンが存在するのではないかと考え，こうした要因も含めて検証することとした。

2. 方法

（1）調査対象者

現在，舞踊を実施している高校生および大学生，女子215名，男子2名，計217名を調査対象とした。平均年齢は19.3（SD＝2.4）歳で，舞踊の種目はモダンダンス，クラシックバレエ，ジャズダンス，競技ダンスの4種類であった。

（2）調査内容

①舞踊に対する動機づけ

The Sports Motivation Scale（SMS）を日本語改訂し調査を行った杉山[5]の項目を参考に，非動機づけ，外的制御，取り入れ，同一化，成就，知識，刺激，の7つの下位尺度に関して，舞踊の実施場面に相当するよう項目の内容を修正した。さらに本研究では，舞踊独自の動機づけを構成する概念として「表現」を加え，各下位尺度5項目，計40項目から成る尺度として使用した。「表現」の質問項目は，「ダンスで表現することが楽しいから」「ダンスで人に何か伝えることが楽しいから」「鑑賞者に自分の表現を理解してもらえると嬉しいから」などから構成された。

②舞踊の目標志向性

杉山[7]によって作成された自我志向性と課題志向性の項目を参考に，舞踊の実施場面に当てはまるよう表現を検討した。なお，自我志向性は他者との比較において相対的に優位に立つことを目標とする傾向であるが，本研究では他者比較の概念に関して，自分の所属する集団内を対象とした場合（質問項目例：「所属する集団の仲間が失敗し，自分は失敗しなかったとき」）と自分の所属する集団外を対象とした場合（質問項目例：「発表会やコンテストで，他の集団のダンサーが失敗し，自分は失敗しなかったとき」）の2種類の下位尺度を作成した。さらに舞踊における目標志向性を検討する上で，他者との関係志向性に関する下位尺度を新たに加えて検討することとした。関係志向性については，自分の所属する集団内での関係（質問項目例：「所属する集団の仲間との一体感を感じたとき」）と，観客との関係を対象とした場合（質問項目例：「鑑賞者がいることによって自分の力がより発揮されたとき」）の2種類について作成した。よって，課題志向性，自我志向性（内），自我志向性（外），関係志向性（内），関係志向性（外），の5つの下位尺度から成り，各下位尺度は5項目，計25項目であった。

3. 結果

（1）舞踊の動機づけ尺度の因子分析および各尺度間の関係

はじめに，SMSで仮定されている7因子のみ35項目について，7因子と指定して因子分析（主因子法，プロマックス回転）を行ったが，仮説の構成概念が抽出されなかった。そこで，成就，同一化，取り入れの項目を1項目減らしたところ，刺激，知識＋成就，同一化＋取り入れ，外的制御，非動機づけ，の5因子としてまとまった。また，内発的動機づけとして仮定されている3因子（刺激，知識，成就）の項目と本研究で新たに加えた表現の項目とを合わせて，あらためて因子分析を行ったところ，刺激，知識＋成就，表現の3因子が抽出され，表現因子は他の内発的動機づけの因子から独立していることが明らかになった。

次に，表現因子以外のSMSと同じ7因子についてのみ，確認的因子分析を行った。刺激と知識は1項目，それ以外の因子は2項目ずつ減らし，最終的にはSMSと同じ7因子の構成概念が認められた（Table 1）。GFIは.868，AGFIは.825，RMSEAは.064であり，採用可能なレベルであり，舞踊の動機づけはスポーツと同様に内発的・外発的・非動機づけの構造を持つことが明らかとなった。次に表現の項目を加えて確認的因子分析を行ったところ，8因子構造が認められたが，適合度の点からさらなる検討が必要と思われる。

また各尺度間の関係をみると，刺激，知識，成就の3因子は.47から.67の範囲の相関係数がみられ，これらは同一化とは中程度の正の相関，取り入れ，外的制御とは低い正の相関，無動機づけとは低い負の相関がみられた。表現は，刺激とは高い相関，成就，知識，同一化と中程度の相関，外的制御とは低い正の相関，無動機づけとは低い負の相関が認められた。

（2）目標志向性尺度の因子分析および動機づけとの関係

目標志向性を測定する25項目のうち，5項目を減らしてプロマックス回転による因子分析を行ったところ，自我志向，関係志向，課題志向の3因子が抽出された（Table 2）。続いて目標志向性の下位尺度（3因子）と動機づけの下位尺度（7因子）との相関関係を分析したところ，自我志向は外的制御と，課題志向と関係志向は刺激・成就・知識・同一化と有意な正の相関があることが示され，自我志向性は外発的動機づけ，課題志向と関係志向は主に内発的動機づけに影響していることが明らかになった。動機づけの表現因子についてみると，課題志向性，関係志向性と中程度の正の相関がみられ，自我志向性との相関はみられなかった（Table 3）。

Table 1　舞踊の動機づけ項目の確認的因子分析結果（標準化推定値）

	刺激	成就	知識	同一化	取り入れ	外的制御	非動機づけ
刺激的な体験で感じる楽しさを味わいたいから	.76						
ダンスに熱中した時に感じる興奮を得たいから	.73						
ダンスをしている時に感じる刺激的な気分を得たいから	.84						
日常では体験できないような興奮を感じたいから	.69						
むずかしい練習方法を覚えていく時に，満足感を感じるから		.65					
ダンスでの自分の弱点が改善された時に感じる満足感を得たいから		.60					
むずかしい動きを行っている時に感じる楽しさのため		.56					
新しい練習方法を考えたり，それを試すのが楽しいから			.76				
やったことのない練習方法や技術を学ぶのが楽しいから			.72				
うまくなるための練習方法を考えたり，それを試すのが楽しいから			.77				
自分の動きがうまくなるようにいろいろ工夫するのが楽しいから			.74				
ダンスは，自分自身の別な側面を伸ばす良い方法であるから				.55			
ダンスは，人生で役に立つことを学ぶ良い方法であるから				.74			
ダンスは，人や社会について学ぶ良い方法であるから				.74			
身体の調子を整えるためには，ダンスを行わなければならないから					.74		
ダンスをしないと健康を維持できないから					.82		
ダンスは，定期的に行わなければならないから					.59		
ダンスをすると知り合いの人達から注目されるから						.60	
ダンスがどんなにじょうずであるかを他の人に見せたいから						.73	
ダンサーであることを人に自慢したいから						.84	
最近，ダンスでは成功しないのではないかと感じている							.72
最近，ダンスでたてた目標が達成できないかもしれないと感じている							.82
ダンスでいくら練習しても，うまくならないのではないかと感じている							.78

因子間相関	刺激	成就	知識	同一化	取り入れ	外的制御	非動機づけ
刺激	—	.76	.59	.57	.23	.29	−.06
成就		—	.89	.58	.11	.21	−14
知識			—	.68	.33	.20	−23
同一化				—	.52	.24	−14
取り入れ					—	.43	.13
外的制御						—	.11
非動機づけ							—

4. 考察

鑑賞者への表現活動である舞踊においても，勝敗や記録が関わるスポーツにおける動機づけを測定する尺度と同様の構成概念がみられ，身体を介した活動として舞踊とスポーツの共通性が動機づけの側面において明らかとなった。しかし，本研究において検証した舞踊独自の新しい因子の可能性については，今回の調査結果からは認められなかったため，今後の検討事項となった。この「表現」因子に関して，他の動機づけの因子との相関関係を分析した結果，特に刺激との高い正の相関がみられたことについては，他者に自分の踊りを見せることにおける興奮・刺激と，自らが今まさに踊っている時に感じる興奮・刺激とは大きな関連があることを示している。舞踊が，自らが踊りに没頭することに対する喜びと同時に，他者に表現すること・見せることに対する喜びを感じることのできる身体活動であることを示す可能性が明らかになったが，舞踊独自の動機づけ構造について，表現因子の位置づけを明確にした上で，信頼性・妥当性の検証を含めさらに分析を進めることが必要であると思われる。

次に，舞踊の目標志向性に関して，自我志向性と関係志向性における他者の概念について，自分の所属する集団内における他者と，所属する集団外（または鑑賞者）における他者とのそれぞれ2種類の下位尺度の設定を試みたが，分析の結果，他者に関する概念は区別されず，自我志向性・関係志向性とも，それぞれひとつのまとまりとして構成されることが明らかになった。また動機づけの下位尺度である刺激・成就・知識・同一化の，内発的動機づけを中心とした因子と，目標志向性における課題志向性と関

Table 2　舞踊の目標志向性項目の探索的因子分析結果（Promax 回転後の因子パターン）

	因子負荷量		
	F1	*F2*	*F3*
F1　自我志向性			
（自我・外）発表会やコンテストで，自分だけが活躍し，他の集団のダンサーが活躍しないとき	**.85**	−.02	−.10
（自我・内）練習や発表会で，自分以外の仲間が誰もうまく踊れないとき	**.84**	−.12	−.01
（自我・内）所属する集団の仲間が失敗し，自分は失敗しなかったとき	**.79**	−.19	.08
（自我・外）発表会やコンテストで，他の集団のダンサーが失敗し，自分は失敗しなかったとき	**.77**	−.05	.09
（自我・外）発表会やコンテストで，他の集団の失敗によって自分が成功したとき	**.76**	−.10	.04
（自我・内）所属する集団の仲間と比べて，自分だけが進歩していると感じたとき	**.73**	.21	−.01
（自我・外）発表会やコンテストで，他の集団のダンサーよりも自分の出来ばえがよかったとき	**.68**	.27	−.19
（自我・内）所属する集団の中で誰も自分と同じように踊れないとき	**.62**	.00	.26
F2　関係志向性			
（関係・内）自分と所属する集団の仲間がともに刺激しあい，よいダンスができたとき	−.01	**.82**	.00
（関係・内）所属する集団の仲間と連携してよいダンスができたとき	−.03	**.80**	.03
（関係・内）所属する集団の仲間との一体感を感じたとき	−.08	**.75**	.12
（関係・外）鑑賞者との一体感を感じたとき	−.03	**.72**	.10
（関係・外）鑑賞者がいることによって自分の力がより発揮されたとき	.06	**.69**	.01
（関係・外）鑑賞者の良い反応によって，さらにうまく踊れたとき	−.01	**.67**	−.06
（関係・外）鑑賞者に注目されていると感じたとき	.40	**.64**	−.11
（関係・内）所属する集団の仲間のよい動きに刺激をうけたとき	−.13	**.60**	−.05
F3　課題志向性			
（課題）発表会やコンテストなどで成功しなくても，うまくなっていると感じたとき	−.01	.05	**.78**
（課題）発表会やコンテストなどで成功しなくても，ベストをつくせたと感じたとき	.00	.04	**.71**
（課題）鑑賞者の反応に関係なく，自分の世界に没頭したとき	.19	−.12	**.67**
（課題）所属する集団の仲間より遅くても，少しずつうまくなっていると感じたとき	−.13	.30	**.50**

因子間相関	*F1*	*F2*	*F3*
F1	—	−.02	.07
F2	−.02	—	.31
F3	.07	.31	—

Table 3　舞踊の動機づけと目標志向性の相関係数

	表現	刺激	成就	知識	同一化	取り入れ	外的制御	非動機づけ	自我志向性	課題志向性	関係志向性
表現	—	.72**	.46**	.55**	.53**	.11	.30*	−.38**	−.03	.39**	.49**
刺激		—	.54**	.49**	.47**	.21**	.27**	−.09	.06	.24**	.35**
成就			—	.67**	.36**	.10	.11	−.13	.06	.25**	.28**
知識				—	.51**	.28**	.17*	−.21**	.08	.27**	.31**
同一化					—	.**	.24**	−.18*	.01	.27**	.31**
取り入れ						—	.34**	.08	.16*	.15*	.14*
外的制御							—	.02	.47**	−.06	.06
非動機づけ								—	.04	−.12	−.08
自我志向性									—	.13	.03
課題志向性										—	.36**
関係志向性											—

*p＜.05，**p＜.01.

係志向性との間に正の相関がみられたことについては，舞踊そのものへの関心・追求に関わる内発的動機づけは，舞踊の達成目標に関して課題の熟達を求めることだけでなく，他のダンサーとの連携や鑑賞者との一体感を目指すこととも関連していることを示すものであった。さらに舞踊の動機づけにおける表現因子が，自我志向性とではなく課題志向性・関係志向性と正の相関を示した点から，「ダンスで人に何かを伝えることが楽しい」といった他者に表現する際の喜びにおいてみられる自己と他者の関係性は，「自分だけが活躍したい」「自分が他者より優れていたい」といった自我志向性におけるそれとは異

なることが明らかになった。舞踊独自の動機づけ構造を検証する上で，今後は自己と他者との関係性という視点を中心に，引き続き分析を行いたいと考える。

謝辞

調査にご協力いただきました高校・大学の先生方，多くの生徒・学生の皆様に深く御礼を申し上げます。

引用文献

1）片岡康子：舞踊の意味と価値：舞踊学講義，大修館書店，東京，2–11（1991）
2）Deci E. L. and Ryan, R. M.: Intrinsic Motivation and self-determination in human behavior, Plenum, New York (1985)
3）Ryan R. M.: Agency and organization: Intrinsic motivation, autonomy, and the self psychological development.: Developmental perspectives on motivation (Nebraska Symposium on Motivation), University of Nebraska Press, Lincoln, 1–56 (1993)
4）Pelletier L. G., et al.: *J. Sport & Exercise Psychol.*, **17**, 35–53 (1995)
5）杉山哲司：日女大紀要（家政），**52**，25–33（2005）
6）Nicholls J. G., et al.: *J. Edu. Psychol.*, **77**, 683–692 (1985)
7）杉山哲司：日女大紀要（家政），**55**，57–63（2008）